

2019年度の會津博物館への贈りもの

肥 田 路 美

大がかりなりニューアル工事を経て設立21年目を迎えた會津八一記念博物館にとって、2019年度は、次の新たな20年に向けてどう歩み出すか、その身構えを模索する年になりました。そうした中で、今年も各方面から貴重な学術資料や美術作品のご寄贈をいただき、コレクションが一段と充実したことは、たいへん有難く喜ばしく思います。ここに心よりの感謝をこめて、簡単にご紹介いたします（詳細は本冊後掲の活動報告をご参照ください）。

まず、會津博物館の特色を形作ってくれる個性的なコレクション群のなかでも、長崎版画をはじめとする阿蘭陀関係資料の富田コレクション、盆石画など愛石趣味が生んだ書画を集めた日比コレクション、独特の戦争画を描き続けた花岡萬舟（1895～1945）の作品コレクション、芸術家たちとの交流を通して作品を蒐集してこられた大社コレクションに、今年度もまた新たな関係書画や資料を追加寄贈いただきました。

ご自身が長年にわたって調査研究をしてこられた学術的資料を寄贈してくださるケースが少ないのも、大学博物館ならではの、奈良東大寺の大仏台座蓮弁に刻まれた天平の菩薩像の拓本を、蓮弁線刻画研究の第一人者から、茨城県新治郡の岩坪貝塚出土資料等を同遺跡の発掘調査に携わった考古学者から、お譲りいただきました。

近代美術部門については、パリで活動した日本人画家ポール・フジノ（1925～1982）のパピエ・コレ作品、ニューヨークを舞台に都市を描いた木村利三郎（1924～2014）の油彩の大作、本学で長く教鞭を執ったロシア人の女性画家ワルワラ・ブブノワ（1886～1983）の手になる深い精神性を湛えた肖像画を、新たに加えることができませんでした。中でも、本学に所縁の抽象画家難波田龍起（1905～1997）、史男（1941～1974）父子のまとまった作品を含む全123点もの寺田コレクションのご寄贈を受けて、これまでの館蔵作品を活かす道が広がりました。

また、寄贈の授受とは単にモノの所有の移動ではなく、それぞれの物語も共に頂戴することでもあります。日本美術院の黎明期に活動した藤井浩祐（1882～1958）の瑞々しい彫刻作品《洗髪》は、ご寄贈者が、逝去されたご友人のもとから引き取って會津博に託されたもの。宮川香山の花器は、本学の健康相談所長の退任を労って当時の総長高田早苗が贈ったもの。小杉放菴（1881～1964）の短冊「あかくらのやまは木の花くさのはな五月の春のかくはしきかな」は、赤倉の山荘にいた放菴が、孫と共に早稲田高等学院ワンダーフォーゲル部で山歩きに来た若き日のご寄贈者に下さったものかどうかがありました。

最もまとまったご寄贈は、會津八一も傾倒した篆刻家松丸東魚（1901～1975）の膨大な作品や関係資料——秦漢古印の摹刻印、自刻印、印譜、書作品から制作道具に及ぶ全1,386点——でした。それを、ご自身

も甲骨文研究の大家であるご息が半生をかけて整理してこられたのですが、このたび、後を託す先として會津博物館を選んでくださったものです。これは、稀代の篆刻家の生涯の仕事をまるごと受贈したに等しく、身の中の震える思いです。

會津博物館にお贈り下さったこれらの貴重な作品・資料を丹念に調査研究して、その学術的、芸術的意義を明らかにし大切に活用していくことが、当館の責務であり活動の基盤となるものですが、決して容易なことではありません。館員一同精進いたしますので、変わらぬご指導とご助力をどうかお願い申し上げます。

(會津八一記念博物館館長)